



今月のお知らせ

新型コロナウイルスの感染状況によっては、事業を変更する場合があります。ご了承ください。

さわやかサロン

日時：8月3日（木）13時30分～

内容：**認知症予防教室 パート2**

認知症予防教室第2弾！

前回の体力測定結果に基づき、簡単に行える体操等を教えていただきます！

皆さまのご参加、お待ちしております

ペン習字(いきいき)教室

日時：8月28日（月）13時30分～

内容：「**絵手紙**」「**実用的な書**」など

準備：筆ペン

～いつでも、どこでも、誰でも、楽しめること。～



手話教室

8月の教室はお休みします。

次回は9月20日（水）です。

皆さまのご参加お待ちしております。



みんなの楽級

日時：8月31日（木）13時30分～

内容：**樹脂ねんどで作るブローチ**

材料費：300円

ねんどをこねて丸めて型取って…
自分オリジナルのかわいいブローチを
一緒に作ってみませんか？

部落解放研究第51回倉吉市集会が開催されます！

日時：2023年8月27日（日）10時～15時（受付開始：9時30分～）

会場：倉吉未来中心、倉吉交流プラザ

研究主題：『人権』ってなんだろう。私の人権とは、あなたの人権とは

分科会（10:00～12:00）

分科会1：地域社会と人権（会場：倉吉未来中心 小ホール）

「コロナ禍後のあなたに居場所がありますか？」

分科会2：子どもの権利と人権（会場：倉吉未来中心 セミナールーム3）

「子どもの心の育ちのなかでいじめを考える」

分科会3：同和問題（会場：倉吉交流プラザ 視聴覚ホール）

「若者が語る部落問題」

分科会4：少数者の人権（会場：倉吉未来中心 セミナールーム7）

「LGBTQ 問題から少数者の人権について考えてみよう」

分科会5：ハラスメント（会場：倉吉交流プラザ 第1研修室）

「ハラスメントのない社会をめざして」

講演会（13:30～15:00）

テーマ：人とのつながりから考える人権

講師：田中 響さん（鳥取看護大学看護学部）

会場：倉吉未来中心 小ホール

※講演は、各分科会会場にてサテライト中継されます。

【事務局】

部落解放研究第51回倉吉市集会実行委員会事務局

（倉吉市役所人権政策課内）

電話：22-8130 FAX：23-9100

さわやか人権文化センターだより



2023年8月1日発行 No.346

【発行所】さわやか人権文化センター

【所在地】〒682-0602

倉吉市上米積 1074-1

【電話兼ファックス】0858-28-2017

【メールアドレス】sawayaka@ncn-k.net

センターだより「さわやか」に関するご意見・ご要望をお寄せください。

みんなの楽級

視察研修に行ってきました！！

7月9日（日）のみんなの楽級では、コロナ禍で中止していた視察研修に3年ぶりに出かけることができました。

今回の研修では、上は80歳代から中学生まで参加し、幅広い年代の方々と共に学習することができました。



当日はあいにくの雨でしたが、赤碕文化センター、日韓交流公園「風の丘」、神崎神社、赤碕塔・花見瀧墓地を巡りました。



赤碕文化センターの取り組みについて学んだり、神崎神社の壮大な彫刻に感動したりと、充実した視察研修となりました。

8月のみんなの楽級は… 「樹脂ねんどで作るブローチ」づくりをします。
一緒に自分オリジナルの作品を作ってみませんか？
皆さまのご参加、お待ちしております。

被爆78年、心と身体の苦痛が消えることはない！

街が、人が、一瞬で焼き尽くされた生き地獄。原子爆弾（原爆）投下から78年目となる夏を迎えます。

1945（昭和 20）年の8月6日に広島が、9日には長崎が、一発の原爆で破壊され、69万人以上が被爆しました。原爆の恐ろしさを五感に焼き付ける被爆者は、一人でも多くの人に知ってほしいと、世界に発信し続けています。

しかし、被爆者のみなさんの平均年齢は85歳を超え、放射線による健康被害に苦しむ人は今も多いのです。当事者の声を聞ける機会がますます減っていきます。



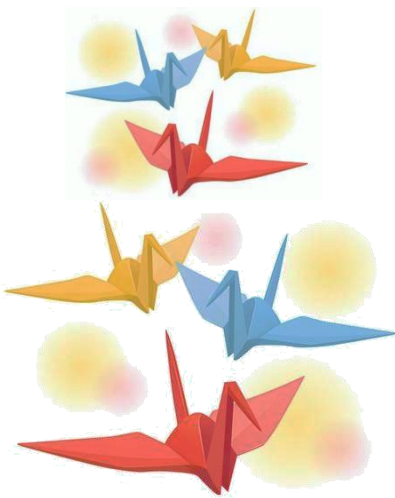
原爆ドーム（広島）

語られた被爆体験

19歳だった1945年8月6日。すさまじい光と音に襲われ、空が真っ黒になった。島（広島湾に浮かぶ金輪島）には次々と負傷者が運び込まれ、兵舎は救護所になった。

「見たこともないひどいけが。腕を少し触ると肉が取れて白い骨が見えた」。薬もなく、水につけた脱脂綿で口をぬらすのが精いっぱい。「みんな『水、水』と涙を流して死んでいった。どこの誰か名前もわからん」。木が足りずに火葬できず、遺体を防空壕に埋めたこともあった。

救護に追われ、帰宅できたのは約1週間後。母には「嫁に行かれんし、子どももできん」と言われた。その後結婚し、息子を2人産んだが、被爆の影響とみられる甲状腺の病気に長年苦しんだ。島での体験は家族にも明かさなかった。



兵士を看護するなかで自身も被爆したMさん（83）は、やけどで苦しむ兵士たちのうめき声が今も耳にこびりついている。

同じく被爆者の夫は「差別を受けるから」と被爆者健康手帳を申請しなかった。「原爆で亡くなることも生き延びることも、どちらもとてつもなくつらい」と訴える。

8歳の軍国少女が、世界平和を願う人たちとの出会いを重ねていくなかで、一人の平和活動家として生きる覚悟を決め、国内外で証言を重ねた。

8月6日に出て行ったきり遺骨が見つからない4歳上の姉を、「今も帰ってこない」と表現した彼女は、被爆体験が昔に起きた出来事ではなく、今に続く悲しみであるといつも訴えている。



「微力でも無力じゃない」高校生平和大使

平和な世界をつくるために、日本の高校生らが続けてきた「高校生平和大使」の活動が、今年で26年目となります。

始まりは1998（平成 10）年。外国で核兵器の実験が行われ、核戦争が起こるかもしれないと、不安が高まった年でした。核兵器をなくすように求める多くの人の署名を集めた長崎県の市民団体が、署名を国連に届ける役割を2人の高校生に「平和大使」として任せました。

1945（昭和 20）年8月9日、原爆でたくさんの方が亡くなった長崎は、平和運動が盛んな土地です。しかし、このころ平和運動への若者の参加が少なく、「若い世代に参加してもらおう」と考えた試みでした。それが成功し、毎年新たに選ばれた高校生平和大使が国連に署名を届ける活動が続くことになりました。

2001（平成 13）年には、高校生たちが街中で核兵器反対の署名を集める「高校生1万人署名活動」を開始しました。この20年あまりで署名活動に参加した生徒は延べ6千人に上ります。高校在学中、署名活動の立ち上げに携わった長崎市のEさん（39）は、「（立場の違う人に）批判され、泣いたこともあった」「懸命に集めた署名を平和大使に届けてもらったとき、思いが込み上げた」と振り返ります。

これまで、400人を超える高校生平和大使が国連に計200万人分以上の署名を届けてきました。スイス・ジュネーブでの軍縮会議でスピーチしたり、ローマカトリック教会の教皇に面会したりもしてきました。その活動が評価され、2018（平成 30）年にはノーベル賞平和賞の候補に名前が挙がりました。

「やれることは精いっぱいやった」

新型コロナウイルス禍のなか、署名活動が制限され、国連訪問も見送られました。それでもオンラインでの情報発信に努め、「やれることを模索し精いっぱいできた」と2020（令和 2）年選出の大使は言います。

今年選ばれた大使は22名です。初期の大使には被爆2世もいましたが、近年は4世の高校生です。「被爆者なき時代」は迫ります。

高校生平和大使の活動は、若者による核兵器反対運動の先駆けになりました。小さな力でも、積み重ねれば何かができると教えてくれます。



出会いと対話「すごく大事な経験に」 第9代高校生平和大使Sさん（35）

平和大使として「自分の手と足を動かして得た出会いと、対話のなかで考えた経験が今につながっている」と思いを語った。

戦後被爆国の日本に生まれた一人として、「核兵器を許さない社会で生きたい」との思いをどう形にすべきか悩んでいた高校時代。平和大使と有志たちによる「高校生1万人署名活動」を知り、自ら知人を募って地元・東京の街頭に立った。

見解の違いから罵声を浴びせられたこともあった。「涙を流しながらも反対の声を持つ人と向き合ったことは、すごく大事な経験だった」。

2006年、平和大使に選ばれた高校3年の夏、核廃絶を求める約4万9千筆の署名をスイス・ジュネーブの国連欧州本部に届けた。軍縮会議を傍聴し、ポーランドのアウシュビッツ強制収容所も訪問。「現場で生の声を聞き、それをつなぐ人になりたい」との思いを強くした。